

フランス語前史

——ガロ=ロマン期について——

松 田 治

I

特殊言語の考察にあたって、その言語の原初形態の認識がいかに重要であるか論をまたない。前世紀来の活発にして根本的な言語考察、人間生活を規定し、あるいは逆に人間生活によって規定されるとも考えられうるこの言語を対象とする科学領域はさまざまな過程を経て、今日では隣接諸分野への影響はもとより、それ自体として第2の哲学たらしとする姿すら見られるのである。言語考察は言語主体の生活諸相への反省なくしては成り立ちえないが、一面では美を追求する一手段であるともいえよう。仏語については従来その傾向がとくに伝えられている。そのきわめて具体的な現象は“*Il ne faut pas dire……*”とさまざまな規定を設け一般に範を垂れた国語学者の出現である。17世紀のヴォージュラがその典型であり、内容的には「かくいうべからず、かくいうべし」式の観察記録の寄集めにすぎないようにも思えるが、結局それが彼の国語愛という美徳、純粋性を保持しようとする繊細な精神の裏打ちを得て、今日の仏語に有形無形の痕跡を残したのである。最近では、“*franglais*”を得意とする世代も少なくないということであるが、これははたして旧来のものに対して意識的になされる世代的嫌悪であるのか、それとも現代仏語の滔々たる流れが必然的に吸収することになる一支流にすぎないのであろうか。筆者はもとより他国語の現在の動きについて云々するいかなる資格をもたないが、ヴォージュラやマレルブがかりに今日目覚めたなら驚かすにはないだろうと考える。そのマレルブであるが16世紀から17世紀にかけての詩文家

であると同時に仏語の語としての美学に心魂をそそいだ学者でもあり、この点ではヴォージュラの師であった。ヴォージュラの世紀にフランス古典文学が盛栄をみたのは人の知るところである。前世紀にもすでにラブレ、モンテーニュ、デュ・ベレ、ロンサールなどの諸家が、思想・詩文を文字に託して後世への大きな遺産とした。かれらはルネサンス運動に鼓舞され人文主義を肥料とした土壌に生い育った本来的な意味での古典作家たちであった。かれらによって現代仏語の基礎は着々と固められ整えられつつあったのである。

10世紀から15世紀までは渾沌あるいは未整理の時代である。この時期は中世仏語として一括されるが、未整理とはいえ強大な支配者からの独立を宣言して立つものの初々しい美しさがそこにはある。この時期の大きな特徴の一つは宗俗の分離と癒着という言語上の二面性である。教会は高邁な精神と強い組織力によって大衆を掌握し支配していた。教会の言語は古典語の形を完全には保持していないまでも依然としてラテン語であった。一方、読み書きをなしうるものが残した文学的作品はすでにもう一つの新しいラテン語を使用し始めていた。これが中世仏語である。しかるに中世仏語による作品は聖史劇その他においてキリストの受難やキリスト教的愛を主題とする内容のものが主流であったといえる。宗教に関して長いあいだ大衆に課せられてきた受動的立場がそこではやはり根強く残っていたわけであるが、しかし仏語そのものはかれらの掌中にあった。そしてこの言語的独立とまではいわないまでも、わずかではあれ言語上のこの分岐こそ、今や支配の具になり諸世紀

にわたってかれらを呪縛していた権威の象徴としてのラテン語を一步一步遠ざけ、ひいてはかれら自身の精神的独立をいつの日にか可能ならしめるべき素地を除々に準備したのである。このわずかなズレを原因として生じたであろう精神的独立を度外視しては、フランス・ルネサンス期における偉大な作家たちの飛躍、詩文の洗練は考えられない。長いあいだ日常生活に干渉してきたラテン語は僧院の厚い壁の中へ古典の濃霧の彼方へいったん姿を消したあとで、その必然の報酬としてふたたび評価を受けたのである。そのとき人々の精神はおおいに自由であった。

この長い暗い時代に先行したのがフランス語の萌芽の時代であった。日常言語としてヨーロッパ各地に広まっていたラテン語が諸々の歴史的衝撃を受けた結果として徐々に古代の形を変えつつあった時代である。小論においてはこの時代をあくまでも仏語の萌芽期としてとらえ、ラテン語が今日のヨーロッパの仏語圏へ入っていった時代の歴史状況、ラテン語が徐々に姿を変えていく過程で他言語の果たした役割などを粗述し、仏語の今日あるゆえを考えることにしたい。推移に対して言語そのものは無意志であって、それはあくまでも言語に対して外からなされる刺激を原因としてもつ。すなわち使用者の問題にほかならない。言語使用者を取り巻く外的状況の観察によってその言語状態もある程度把握できると筆者は考える。また仏語を継承者とするにしろ発生者とするにしろ、ラテン語を度外視することは不可能であり、そこからローマについていささかなりとも考える必要が生じる。

II

ラテン語 (latin) という名称はそれが使用されていた地域名であるラティウム (Latium) からきている。ラテン語はもちろんギリシア語などとともに印欧語族に属する言語である。しかし、そもそもから独立して一家をなしていたのではなくて、紀元前3,4世紀ごろはイタリア半

島で話されていた他の言語、すなわちオスク語、ウンブリア語などといわば姉妹関係にあった。これらが一括してイタリア語派と称されるもので印欧祖語の下位言語としての一派を形成していた。地理的にこの3者は隣接しており、ラテン語族はティベリス河流域の平野に位置して南のオスク語族、北東のウンブリア語族には含まれていた。

ラテン人は前1000年ごろ北方から侵入してきた印欧語族であった。かれらの一部がイタリア中部の西海岸のラティウムに定着したラテン人である。のちに巨大都市へと発展したローマはティベリス河の左岸に位置し、河口にあるオステティアから約25キロのところにあった。同じ河の右岸から西北方へ広がる一帯を占めていたのはエトルリア人であった。この民族については今なお不明なことが多いが、少なくともかれらの言語が印欧語族に属するものではないということは定説となっている。このエトルリア人の住む地域のローマからみて右方に位置していたのがウンブリア語族であった。ウンブリア語族やオスク語族は上述したごとく、ラテン人とともにイタリア語派に属していたが、草創期のローマにとってはいずれも敵ではありえなかった。最大の敵は非印欧語族であるエトルリア人にほかならなかった。かれらは紀元前1000年から800年のあいだに小アジアから海を渡ってイタリア北方の西海岸に上陸したであろうと推測されている。エトルリア人はその言語をギリシア文字によって写していたが、その意味内容は現在でもまだ不明のままにとどまっている。したがってラテン人がかれらに隣接していたことから生じる摩擦は歴史的に言語史的にも大きな意味をもっているのである。初期のローマは伝説、事実をとりまぜて王制が行なわれていたという。ロムルスを初代の王として以下6人の王が続いたのであるが、最後の3代はエトルリア人であったとされている。共和制へ移行する前のローマの数世代はエトルリア人によって支配されていたことになるが、もしその支配体制が継続されていたら、のちに国運の隆盛とともに繁栄を

きわめたラテン語はもとよりその下位言語として今日にいたったロマンス諸語もはたしてその存在を得たかどうかかわからないのである。最後の王タルクイニウス・スペルブスが前508年に追放されたあとローマを中心とする地域に居住していたラテン人の支配層である貴族たちは自らのために共和制を選択した。そしてエトルリアに対する優越を決定的にしたのが前392年になされたエトルリアの都市ウェイイ攻略の成功であった。このローマの勝利は二つの点できわめて重要であったといわねばならない。一つはエトルリアの言語がラテン語とは素性を異にしていたので、もしこのような歴史的転回点（事実、自体はもちろんローカルなものではあったが）が生じなかったらラテン語が存続しえたかどうかということ。もう一つはローマとウェイイの二都市のいずれがティベリスの兩岸を抑え、河口を自己の版図に編入することができたかということである¹⁾。結果的にはローマがウェイイを徹底的に破壊しその領土を奪取して隆運の基礎を固めたのであったが、もしもこの戦いが逆の結果に終わっていたら以後の運命も逆転し、ローマが数世紀にわたって享受した繁栄はエトルリア人のものになっていたかもしれない。内陸を流れる河を制圧し有利な港湾を領土内にもつことがいかにその民族・国家を大ならしめるものであるかは古代に栄えた諸文明の教えるところである。かくしてローマを中心に定着していたラテン人は他地域のラテン人やエトルリアを制することによって徐々に半島支配権を自己のものにしつつあった。その過程で一つ看過してはならないのは、ウェイイ攻略の直後、前390年ごろになされたガリアから来た異民族によるローマ占領である。この民族はいうまでもなくケルト人であるが、かれらは北方からイタリア半島へ侵入しエトルリアの領土をつぎつぎに荒掠して南下してきた。そしてティベリスの岸辺、ローマの領域へ到達し、なんなくこの都市を占領し、破壊・掠奪をほしいままにした。しかるに、

ローマにとってこの上なく幸したことであるが、かれらは占領地にそのまま定着することを欲せず、代わりに莫大な金を要求しこれを受け取るや破壊された都市をその所有者に返して立ち去ったのである。ここでもまたエトルリアについて述べたと同様に、国家の存続を左右し、言語の変化を生起せしめたかもしれぬ大きな歴史的要素が回避されているとみてよいであろう。ケルト人はこの占領からおよそ3世紀半のちに逆にローマ人によってなされる占領によってしたたかに影響をこうむることになるのである。もしかれらがローマに定着し高度に文明を発達させ版図を広げていったなら、おそらくラテン語に代わってケルト語が今日よりよく知られているという結果になったであろうしフランス語もまったく別物になっていたであろう²⁾。仮定はあくまでも仮定にすぎないが、やはりわれわれに一種の戦慄を与えずにおかない。さてこの侵略戦は迎えうったローマ側の兵力・戦法の不備を証す結果に終わったが、以後の国内情勢に多大な影響を与えた。貴族専制的な共和制維持がますます困難になり、当時まだ兵役を果たす義務のなかった市民層がこの敗北によって政治的に台頭する機会を与えられたのである。

以後ローマは、イタリア半島を制覇するのにさほどの長月日を要しなかった。南部イタリアは当時マグナ・グラエキアと呼ばれていたが、ここにギリシアの植民市であるタレントゥムが勢威を誇っていた。ローマの勢力拡大とともに必然的に両者間に摩擦が生じタレントゥムはエピロスの王ピュルロスに援助を求めた。しかしこの王も時には勝利を収めたことはあったがローマの強敵たりえず、野心を満たせぬままタレントゥムを棄てざるをえなかった（前275年）。かくしてローマは半島を完全に支配することになった。かつてティベリス流域で小集団をなしていた一部のラテン人が今や西部世界で最大の国家に成長したのである。しかしローマの前にはこれまでにない恐るべき敵カルタゴが待ちかまえていた。当時のカルタゴは文明文化の発達

1) M. Rostovtzeff, *Rome*, p. 28.

2) 泉井久之助著『ヨーロッパの言語』, 177頁.

も戦力においてもローマと肩を並べていて両者の衝突はいずれ不可避のものであった。いわゆるポエニ戦役は3次にわたって戦われたがそれはローマの地中海制覇および北アフリカへの進出という結果に終わった。第1次戦役が終わるとカルタゴは賠償としてその植民地シシリーをローマに渡さざるをえなかった。そしてこの地がローマの最別の属州 (provincia ; province) となったのである。ローマは以後ギリシア諸都市、ヒスパニアなどを掌中にし地中海を抑え、さらにブリタニア、ガリアなどへも進出していくのであるがそれぞれ多少のニュアンスの差異こそあれ、いずれの場合もこのシシリー属州化という事件にそのプロトタイプをみることができるといっても過言ではない。第2次戦役で、ヘレニズム文明を起こしたマケドニアのアレクサンドロス王にも並び称される軍略家ハンニバルにさんざん苦しめられ、カルタゴ軍に半島縦断を許したりしたあげく、スキピオ・アフリカヌスなどの人物を得てようやくこの大將軍を敗退せしめたのであるが、ローマはとくにこの戦役で勝利をものにしたあと対外政策においてとみに積極的な姿勢をみせるようになった。第3次戦役は前146年に終結した。ローマは属州、植民地を得て地中海世界に広大な勢力圏を築いたが、そのために種々雑多な政治上の問題が逆流してくるのは当然の結果である。ポエニ戦役後はまさに政争・内乱の世紀であり、個々の暗殺はもとより兵力をたのしみとした集団的な殺戮などの暴力が荒れ狂い、共和制の支えともいふべき言論の力はきわめてかぼそくなっていった。いわば共和制崩壊の100年である。グラックス兄弟、マリウス、スルラ、ポンペイウス、クラッスス、キケロ、カエサルなどの政治家、軍人、論客などが各人各様の野望と理想に駆られて舞台を継承してきた。結局はカエサルがその類まれなる智謀と軍略とによって長い波乱の時代を一応は收拾した。そして彼の独裁権は長期的に前もって認められていた³⁾。しかし、王位王冠

3) 前46年に10年間の dictator, 44年には終身の dictator に就任。

という東洋的な権威の象徴に秋波を送り始めていたこの独裁者も100年間の目まぐるしい転変のうちに政局転換のための常套手段と化してしまった暴力の刃を逃れることはできなかった。前44年3月ブルトゥスやカッシウスら名門の青年を領袖とする一派がカエサルを暗殺した。時代的な混乱は諸種の矛盾や皮肉を一挙に表面化することがある。カエサル暗殺もその例に洩れなかった。そもそもローマの共和制そのものが古代社会の特質ともいふべき奴隷制度に立脚したもので、今日でいう言葉の意味ではおよそナンセンスなものであるがそれはさておいて、共和制護持を理想としたかれらが手段として暴力を用いたことは皮肉であるし、また、その結果、かれらが自らに招いた事態は深刻きわまるものであった。共和制をとことん踏みにじっていたはずのカエサルはすぐれた政治感覚によって民心を収攬することに怠りはなかった。その死後、アントニウスの追悼演説で公表された遺言もあいまって、民衆は暗殺者たちに対する敵意を明らかにした。かれらはローマを離れざるを得なくなった。ブルトゥスもカッシウスも、カエサルの第1の部アントニウスや、カエサルによってその後継者として指名されたオクタウィアヌスらによって追われ、戦いに敗れてともに自殺した。共和制の復活を目的として企てられた暗殺は結果としてその終焉を早めたにすぎなかった。以後の10年間はアントニウスとオクタウィアヌスの抗争に明け暮れするが、31年のアクティウムの海戦で勝ったオクタウィアヌス(のちにアウグストゥス)が帝政への道を拓くことになる。

III

ガリア征服がカエサルによってなされたことは周知のとおりである。ガリアに論を進める前にここでラテン文学および文学最盛期のラテン語について簡単にふれておきたい。

ラテン文学はふつうアッピウス・クラウディウス・カエクスから説き起こされる。しかしその作品は今日論ずるに足るほどの量は残されて

いない。前3世紀中葉にいたってリウィウス・アンドロニクス、プラウトゥス、エンニウスらが出てようやくラテン文学の基礎が固められた。とはいえこの時代の文学は純粹にローマのものではなくギリシア文学の模倣継承とするのが一般であり、ホメロスや悲喜劇がラテン語で移入された時代である。

前2世紀に入ると前章でみたごとくローマの外地進出がはげしくなり、さまざまな問題が生じたのであるが、この時代のおもな作家として大カト、テレンティウス、ルキリウスなどがあげられる。大カトは監察官を務めた人で当時ローマへ流入しつつあったギリシア風を嫌ってローマの伝統を固守しようとした。テレンティウスはギリシアの喜劇作家メナンドロスに範を求めて作品を書き、われわれは今日6編の作品を見ることができる。上記プラウトゥスらとともに17世紀フランスのモリエールらの完成した古典喜劇に測り知れない影響を与えた作家である。ルキリウスは諷刺詩によって人を攻撃したが、ローマの作家が声を大にしてこれこそわれわれローマ人の創り出したものであると自慢した⁴⁾ ジャンルの先達となり、ホラティウス、ペルシウス、ユウェナリスらの後継者をもちえた点で重要な作家であった。

前1世紀には、現実の政治的争乱とは裏腹に文学はローマ史上もっとも華やかな時代を迎えた。時期的に少しずれはあるが散文、韻文ともに最高度に洗練され、いわゆる黄金期を現出せしめたのである。文学とともにラテン語がその魅力を十分に発揮したことは当然であった。この世紀前半の中心的な作家はキケロであった。多数の演説、書簡、哲学的著作を今日に残しており、ラテン散文の父といわれるとおり、文学およびラテン語そのものに関する彼の功績は測りがたい。また彼は共和制を支持する政治家でもあって、それぞれにおいて価値多い膨大な量の作品が多忙で危険きわまりない政治活動のうちになされたのは驚くべきことである。キケロ

と時を同じうして政治に身を投じたカエサルも、ラテン散文の完成においてはキケロと共働したといえるだろう。ガリアに赴いて侵略を行なったかれは元老院、市民への戦況報告として「ガリア戦記」を三人称形式で記した。この作品は作者の政治的意図に発したプロパガンダ臭の強いものとされるが、しかし文学的に彼独自の文体が形成されていることに変わりはない。キケロといいカエサルといい、一方は共和制復活を唱え、他方はそれを事実として踏みにじりつつ独裁者の道を行んで本質的に相容れるところのなかった2人が文学・言語に資するところは一つであったのは皮肉ともいえよう。その他にルクレティウス、カトルス、サルスティウス、ウァルロなどがいた。そして1世紀後半のいわゆるアウグストゥス時代になってウェルギリウス、ホラティウスなどが現われてラテン韻文を完成させた。

さて、ラテン語と現代仏語のあいだにある言語学的異同について述べることは小論の目的ではなく、またその枠に収まるものでもない。ここでは広大なガリアの森へ浸透し徐々に崩れていくようになる以前のごくふつうのラテン語の文例という意味で黄金期の作家の文章を2,3抜き出し、それに仏語訳を並べて参考にすることにする。

Siquidem Homerus fuit et Hesiodus ante Romam conditam……

=s'il est vrai qu'Homère et Hésiode vivaient avant la fondation de Rome…
…(Cicero, Tusc. disp, I,3)⁵⁾

“fuit”は直説法完了三人称で現在不定法は“esse”である。仏語の“être”にあたる。文中での意味は訳文中に“vivaient”とあるように属詞をともなう“être”のそれではなく独立して「生存」を意味するものである。“vivre, 生きる”の意味での“être”の用法はもちろん仏語にもあり、“Qui sait si nous serons demain?”とか“Depuisqu'elle n'est plus, je n'ai fait que

4) “Graecis intacti carminis……”, Hor., *Sermones*, I,10,66.

5) Texte établi par G. Fohlen, traduit par J. Humbert, Belles Lettres.

semblant de vivre”⁶⁾などの例を見ることができ。さてキケロの文章で主語を構成するのは明らかに Homerus と Hesiodus という2人の人名である。複数だから仏語では動詞は三人称複数の形 (vivaient) が用いられるが、ここでは “fuerunt” とはしていない。主語と動詞の数の一致という点でラテン語は仏語とちがってきわめてゆるやかである。この場合は第1の主語の直後に動詞がきているので一致の規則にとらわれないでいるのである⁷⁾。これは語順にもかかわるわけで、ラテン語では一般に動詞は文末に置かれるが、ここでは主語の一部ともいうべき “Hesiodus” がはみ出して動詞の後にきている。仏語においては主語は動詞の前にあるのが原則である。

“siquidem” は “si quidem” とつづられることもある。条件の接続詞はラテン・仏語ともに “si” である。“vraiment” と訳される “quidem” は現代語には痕跡をとどめていない。前置詞 “ante” も仏語には残っていない (“ante meridiem” のような特殊例を除く)。ただ若干の語の接頭辞として姿を見せるにすぎない (antédiluvien)。ただし訳文にあるように、この語は “avante” にとって代わられたのであるが、その語源が “abante” であり、これは “ante” に接頭辞 “ab-” をつけて “ante” を強調した語であるとされていて、したがって “ante” は “avant” の中に吸収されて生きつづけているわけである⁸⁾。

“Romam” は “Roma” の対格で前置詞 “ante” の要求による。仏語の前置詞は特定の格を要しないので、ここにも語法上の相違が見られ

るのである。“conditam” は動詞 “condo” の完了分詞 “conditus” の女性対格である。ラテン語の完了分詞も仏語の過去分詞もともに形容詞として名詞を修飾することができ、その場合、性・数を被修飾語のそれに一致させる。“Homerus; Hesiodus” の “-us” は男性単数の主格を表示するが仏語では “-e” になって主語その他あらゆる状況で使用される。

quod ab nonnullis Gallis sollicitarentur.
=parce qu'ils étaient l'objet de sollicitations
de la part de nombreux Gaulois (Caesar, B.G. 2.1.3)⁹⁾

動機とか理由を示すラテン語の接続詞は “propterea quod” ないしたんに “quod” がふつうである。訳文中の “parce que” は仏語でごくふつうの接続詞であるが、この “que” に “quod” は吸収されている。“parce” も “per” および “ecce-hoc (lat. vulg.) < hoc” である。しかし見られるごとく “quod” と “parce que” は形態的にまったく同一でない。ラテン語で代名詞主語がふつう示されないことは周知のとおりである。quod 以下の従属文中の主語は原文では “Belgae” であるが訳文では “ils” として示されている。仏語では一般的な人称用法での動詞の主語の表示は義務であり、強調を示す場合などに任意に代名詞が付加されたラテン語文はこの点きわめて自由である。さてその動詞 “sollicitarentur” であるが、これは接続法過去の所相である。ラテン語の動詞は、完了系以外の一般的な人称用法の所相は近代語のように助動詞を使わずに語尾屈折によって表わされる¹⁰⁾ 仏

6) いずれも *Le Petit Robert* 引用例。

7) A. Ernout et Fr. Thomas, *Syntaxe Latine*, p.130.

8) Dauzat, Dubois, Mitterrand, *Nouveau dictionnaire étymologique et historique*, Larousse, および *Le Petit Robert*. ただしラテン学者の “abante” に関する扱いはさほど一定していない。Gaffiot は、1) 副詞、2) 対格支配の前置詞、Lewis-Short は、1) 奪格支配の前置詞、2) 副詞、*Oxf. Lat. Dict.* はただ副詞とのみ。Hofmann-Szantyr, *Lateinische, Syntaxe und Stilistik* は対格支配の前置詞および副詞 (S. 224), Ernout-Thomas は副詞および対格支配の前置詞 (*op. cit.*, p. 122) とし扱っている。

9) Ernout-Thomas (*op. cit.*, p. 207) による。なお、Constans は “[Les motifs……étaient les suivants: d'abord……; puis,] un assez grand nombre de Gaulois les sollicitaient,” と訳している (*Belles Lettres*).

10) たとえば “amare (= aimer)” は amor (je suis aimé), amabar (j'étais aimé), amabor (je serai aimé) (以上直説法), amer (que je sois aimé), amarer (que je fusse aimé) (以上接続法) となる。これにたいして完了系は直説法・接続法ともに “amatumesse” を基にする。

語ではつねに “être + p.p.” の図式ですべて処理され、ラテン語の語尾屈折による方式は失われた。ここでも “être sollicité” が予想されるのであるが、訳者はこの所相表現を避け名詞による言い回しをしている。ちなみに注に示したように Constans は主語を入れ換えることによって能相にしている。

“ab; a” はいわゆる動作主補語を導く前置詞で仏語では “par” が一般的である。この前置詞の格要求によって “nonnullis Gallis” は奪格になる。“nonnullus” は二つの否定辞によってあるものの存在を積極的に表示する。仏語の “nul” はこの “nullus” であるが、しかしこの現代の否定形容詞には “nonnullus” のような否定接頭辞を使う表現はない。

Dulce et decorum est pro patria mori.
= Il est doux, il est beau de mourir
pour la patrie (Horatius, Carm. III3,13)¹¹⁾

訳文は無骨さは免れがたいが “Mourir pour la patrie est doux et beau” とすることもできる。“Dulce; decorum” は形容詞で共に中性形であるがこれは主語になっている “mori” が不定法であり、ラテン語の不定法は中性として扱われるからである。仏語にはこの中性という *genre* がない。“Dulce < dulcis : doux”, “pro : pour” “patria : patrie”, “mori : mourir” などは語中でわずかな変化があるだけでほとんど同じである。“est, et” はともに相等しい。“beau” と訳されている “decorum” は *decorus* < *decor* < *decet* として理解できるが、仏語の “décor; décorer” などと同根であることはいうまでもない。仏語には、*decet* 系で “decorus” に対応する語はないが、しかしこうしてみると例文とその訳文は文体的にほとんど同一である。

最後に黄金期に先行する時代の作家の文章を一つあげよう。

Syrus cum illo vestro consusurrant.
= Syrus avec votre esclave chuchotent
(Terentius, Heaut., 473)¹²⁾

11) Texte établi et traduit par F. Villeneuve, Belles Lettres.

いわゆる *syllipsis* 構文の例である。本来は “Syrus” 一個が主語で “cum illo vestro” は随伴を表わす状況補語句であるから動詞は単数の “consusurrat” になるはずである。ところが “cum” によって単数主語に結ばれた単数名詞 (illo vestro) は本来の主語と等価なもう一つの主語と見なされ、すなわちあたかも等位接続詞によって結ばれた主格名詞のごとくみなされて、動詞が一致の規則から離れて複数形を取る (Syrus et ille vester)¹³⁾。訳文も原文の語順を尊重し、*syllipsis* もそのままにしている。しかし、通常の仏語では、“avec” 以下の状況補語句を本来の位置に置けば、動詞は単数になる (Syrus chuchote avec votre esclave)。この訳し方¹⁴⁾は仏語でもこの語法がありうることを示唆している。事実われわれは以下の例をあげることができる。

Le singe avec le léopard gagnaient de l'argent à la foire (La Fontaine, Fables, 9, 3)

Sur leurs corps et leurs ailes Brillent des yeux sans nombre, *assidus sentinelles* (Delille, Paradis perdu).

最初の例は数の *syllipsis* であるが後者は性の *syllipsis* 例である。いずれにしるこの語法が仏語にまったくないわけではない。

以上、わずかな例でラテン語と仏語を並べて、語形、意味、文体などについてとくに語論上の区別もせず簡単に比べてみたが、2000年の時間を考えれば驚くべきような変化はなく、仏語は今日のラテン語であるともいえるということが感得される。さてそのラテン語がいわばフランス語的崩れを始めるのは当然ガリアという地理条件を得てからのことである。

IV

ガリア (Gallia; la Gaule) はピレネー、アル

12) Ernout-Thomas (*op. cit.*, p. 139) による。

13) *Ibid.*

14) J. Marouzeau も “Syrus avec celui de chez vous font (イタリック筆者) des papotages” として “*syllipsis* を尊重している (Belles Lettres).

プス、ライン、大西洋に囲まれたヨーロッパ地域をさす古い名称である。共和期のローマ人はアルプスの手前のガリア (Gallia Cisalpina) とアルプスの彼方のガリア (Gallia Transalpina) とを区別していた。Gallia Cisalpina は紀元前400年ごろケルト人によって占領され、さらに2世紀にはローマの属州となった地域である。したがってここはカエサルの遠征以前にすでにローマ化されていた。カエサルの征服は前58～51年にかけてなされ、これによってガリア全域がローマの属州になったのであるが、ここではまずガリアの歴史を簡単に振り返ってみたい。

ガリアで歴史的に確認されている最初の住民はケルト人である。かれらはおそらく中央ヨーロッパを起点として紀元前1000年紀を通じて侵入・征服を重ねた。カエサルが「ケルト人」と呼ぶものは前500年頃、現在のベルギー地帯のケルト人は前250～150年のあいだに定着していた。この侵入者たちはその以前に定着していた先住民に比して少数派であったが、かれらの言語やその他の文明の諸要素を新たにもたらし先住民の中に入り込んだ。「ガリア人」という名にふさわしいのはこの両者混交から生じた人種なのである。いわゆるラテーヌ (La Tène) 文化は500年ごろから始まる。おそらく農業よりも牧畜業を好んだので、かれらは長いあいだ定住するというをしなかったが肥沃な土壌とたやすい交易に助けられて徐々に変化していった。この時代、南部においてはギリシアの影響が大きい。前6世紀ギリシア人はローヌ河口にマッサリア (Μασσαλία) という植民市を起こした。今日のマルセイユである。この新都市を中心にさらに近隣にいわば植民市の支店ができた。Antibes, Agde, Saint-Tropez, Nice などである。ギリシア諸都市は当初からガリア人やグリア人らの貧欲さを避けたのでその文化がガリア全域に広まることはなかった。

前125年近隣諸族に悩まされたマッサリアの要請を受けてローマ人がやってきた。かれらはこの機を逃さずローヌの水路とラングドック地方を併合して新しい属州とした。カエサル以前

に積極的にローマ側からなされた最初のケルト攻略である。この遠征の途次ローマ軍はケルト内部におけるアルウェルニ族の支配を打ち崩すことによってイタリア商業の新しい捌け口を作った。ほどなくして新しい試練がガリアを襲った。前109年から105年にかけてキンブリ族がやってきたのである。ガリア人は要塞に追い込まれた。前1世紀になるとライン地方でまた移動が始まりゲルマンの諸族がガリアめざして西進する。ケルト人の中で支配権を握ろうとしたハエドゥイ族に対して、隣接するセクワニ族は、スエウイ族の王アリオウイストゥスに援助を求めた。アリオウイストゥスがかれらの土地を62年ごろ占領したためヘルウェティ族はその地方を離れざるをえなくなった。かくしてガリアは、一方はゲルマン、他方はローマという二つの大勢力によって挟撃される形になった。ローマの絶対的な統率者たらんとする野心をもってカエサルがガリアに乗り込んできたのはまさにこの時期であった。

ガリア平定はカエサルにとってさえ9年前後という苦難にみちた危険きわまりない年月が必要だった。これはしかし広大な土地、諸部族の流動、イタリアとは異なる季候風土、そしてローマ人にとってすぐには把握しがたい住民の生活様式などを考慮すれば決して長い年月とはいえないだろう。かれが最初に干戈を交えたのはヘルウェティ族とライン近辺のゲルマン人相手であった。この戦いでかれは中央ガリア諸部族の支援を受け、その結果かれらの保護者としての立場を得た。この関係は北と西のガリア人、すなわちベルガエ、アルモリカ、アキタニア人たちによって嫌われた。カエサルがこれらの住民をなんとか屈伏させたとき、今度は新たに中央ガリアの住民の間からいわば国家的規模でローマにそむこうとする気運が生じてきた。かれらは今やローマの友情というものがガリアにとっては隷属を意味するものであって、かれらの自由の吊鐘にほかならないということを見抜いていた。前52年ウェルキンゲトリクスが全兵力を糾合してこの危険な友人を中央ガリアから

除こうとした。有能な指揮者であるウェルキンゲトリクスは、ゲルゴウイアでローマ軍を退却させたこともあったが、結局アレシアの要塞に封じ込められて9月に降伏した。

カエサルに勝利をもたらしたのは彼自身の軍事的才能と活動力であり、それにもましてガリア人同士の不和であった。北方からのゲルマンの侵入によってガリア内部に混乱のあったところだから時期的にも都合がよかった。戦いを終えたカエサルが手中にしたもの、それは軍事的名声、忠実な軍隊、そして金である。野心を抱いてガリアにきた彼がそれを満たすに必要なものすべてを獲得したのである。ガリアにおける仕事はすべて終了した¹⁵⁾。しかるにガリアにとってはこれが新しい時代のはじまりである。つまりゲルマンの大移動にいたるまでのローマ統治下におけるガロ＝ロマン文化のはじまりである。

各都市は自治を行なったが、ガリア人の本来的にもっていた自由は失われた。各地の首長にはローマにとって都合の良い人物しか選ばれず、部族相互間の同盟とか主従関係といったものは一切許されなかった。前27年カエサルの後を継いでローマの支配者となったアウグストゥスはガリアの行政機構を整えた。彼はカエサルによって獲得された地域をガリア・ベルギカ、ガリア・ルグドゥネンシス、アクィタニアの3州に分け、新設の植民市ルグドゥヌム（リヨン）に駐在する総督に統轄させた。後2世紀ティベリウス帝はライン流域地方をガリアから分け、上ゲルマニアと下ゲルマニアの2属州として独立させ、従来からのガリア・ナルボネンシスと合わせて全ガリアを6州編成とした。このような属州編成の過程でローマの巧妙な統治策が実施されたのは当然で、ローマに対する貢献度によって各部族間に政治経済上の差別待遇がなされた。

ローマは属州支配をよりたやすくするために多くの植民市を設けた。Narbonne, Arles, Lyon,

Nîmes, Fréjus などである。都市新設によってガリア人はじかにローマの都会生活に触れるようになった。地主階級の富裕なガリア人はこういう都市に定住した。そしてこういう地域で急速にラテン語が広まったのである。かれらは自分の住む都市をローマ風に整えることに意を用いた。いたる所で凱旋門、神殿、バシリカ、公共浴場などが建てられた。劇場や競技場における見世物の悪趣味もそのままガリアに広まった。かれらはまたギリシア以来の伝統をもつ弁論術を教える学校を建てその維持につとめた。かくしてかつての貴族階級を中心にガリア人はローマ化の歩みを速め、ローマ文化は都市はいうに及ばず農村にも普及し、ケルト語は徐々に駆逐され、ローマ支配が終わる時代までには全ガリアはラテン語圏に入った。

ローマの支配は最初の200年間は成功した。しかし2世紀末から3世紀にかけてローマのガリア統治を動揺させる事件が頻発し、ついに395年東西両帝国に分裂した。ローマ国内の政治的危機、独立をめざしたガリアでの内乱¹⁶⁾などがあったが、この趨勢に拍車をかけたのは258年と276年になされたゲルマン人の侵入である。この時の侵入は一時的で、ローマの皇帝にガリア諸都市の要塞としての改造の必要性を認識させた。しかしこういった物理的な侵入れとは裏腹にすでに経済的変動が深く進行し、帝国の行政は行き届かず、収税機能が麻痺していた。必然的に軍隊の給与が滞って士気を低下させたため辺境の守りが弱体化し、ついに5世紀になるとゲルマン民族の大移動が起こり、ローマのガリア支配は終わるのである。

406年フランク人はヴァンダル、スエウイ、アラニ諸族からなる遊牧民に進路を明けた。かれらはガリアに3年滞留したのちスペインに向かった。この隙に乗じてブルグンド、アラマン、フランクはライン左岸に定着した。411年西ゴート族がナルボネンシスを占領した。アルモリ

16) ラインの軍隊がその指揮者 Postumus を「かれらの皇帝」としてかつぎ出した(258年)。Postumus は10年後部下に殺されたが、この「帝国」はアウレリアヌスがガリアを取り戻すまで15年続いた。

15) Rostovtzeff, *op. cit.*, p. 127.

カは当時混乱が続いていたが、サクソンに追われたブリトン人がやってきて住みついた。当時はまたアッティラの率いるフン族も、ガリアに勢力を伸ばしようとしていた。彼はしかしローマの將軍アエティウスに行く手を阻まれた。こういった状態でのガリアはフランク、ブルグンド、西ゴートの支配するところとなり、西ローマ領はわずかに中・北部ガリアにすぎなかった。ローマとの接触も断たれ、まったく孤立していたが476年に滅びた。しかしその息の根を止めたのはフランク人の一支族の王クロヴィスだった(486年)。かくしてガリアにはローマ帝国の影も形もなくなりゲルマンから流れてきた諸族が代わって支配者となったのである。西ゴート族が当時ガリアの半分以上を占めていたが、最後の勝利はクロヴィスの手中に帰した。彼はキリスト教に帰依し教会の支持を得て、他のゲルマン族を亡ぼしフランク族を統合することによってガリアを征服した。ガロ＝ロマン人は彼を支配者として認め、ここにフランク人との交わりが始まり、ガリアの住民はガロ＝ロマンからフランクとその名を代えるのである。フランスの国名がフランク人に与えられたことはいまでもない (Francia ; France)。

簡単にガリアの歴史を述べたが、その歴史を動かす主役としてケルト人、ローマ人、ゲルマン人、さらに南部においてギリシア人などが登場した。ラテン語圏はカエサルの征服以来これまでになく拡大された。ガリアの先住民としてあったケルト人は自らの言語ケルト語を忘れていった。一政治家の野心から始まったにしては、これは言語史上で他に類の少ない大変動である。5世紀にいたってガリアにおけるローマ勢力を亡ぼしたゲルマン人にしてもその言語を維持する代わりにすでにあるガロ＝ロマン語を自らのものにしていった。かれらも征服者の名に値するが言語の上ではローマの道を歩めなかったわけである。さてこのフランス語の萌芽期において、ラテン語は論外であるが、ケルト語、ゲルマン語、ギリシア語などは完全に消えたのだろうか。

V

前章で述べたように、前6世紀ごろ小アジアのフォーカイアのギリシア人たちはガリアの地中海沿岸地域に渡ってそこでマッサリアその他の都市を建てた。これらの都市のことをギリシア人の“comptoirs”と呼ぶ人¹⁷⁾がいるが、まさにそのとおりである。かれらは商人でこそあれ決して軍人ではなかった。これはラテン語をガリアに広めたローマの姿とは対照的であり、ギリシア語はいわば今日にいたったでもあろうより広い領土を失っていたのである。かれらはまた本質的な意味での文化の伝播者たりえなかった。あくまでも商業をこととし海上を往来することによって利益をあげるのが主たる生活であり、住んでいる都市自体は相応に華やかであってもかれらは内陸へ踏み込むことはしなかった。都市内部ではかれらギリシア人の居住区と原住民のそれとを隔てる壁のあることもしばしばだったといわれる¹⁸⁾。このような状態では良かれ悪しかれ言語が広まることはありえない。それゆえガロ＝ロマン期のギリシア語がごくわずかしか、それもプロヴァンスという限られた地域にしか痕をとどめなかったのは当然であった。

今日もっとも明らかなのはこの地方の都市名である。まずかれらの首都は現在のマルセーユであるが、ギリシア語の Massálía はアクセントの位置が変わっただけで Massília としてラテン語に入り、これが Marseille になった。Nice は勝利の女神(Níkē)に捧げられた都市(Níkaiá)である。この都市名などはきわめてギリシア的な造語法によっているといえよう。ありふれた語の合成による例に Agde がある。これは agathé (良い), týkhē (運) がらなるが、つねに風浪に煩わされねばならなかった当時の海上貿易商人にとってはいかにも好ましい名称である。Nice から海岸沿いに約20キロほど南下す

17) Ch. Bruneau, *Petite histoire de la langue française des origines à la Révolution*, p. 3.

18) W. V. Wartburg, *Évolution et structure de la langue française*, p. 18.

ると Artibes がある。これは Nice と向かい合っているという地理的な点から名が出ている (Antípolis)。Marseille と同様にラテン語形がそのまま仏語に保たれているのはピレネ＝オリアンタル県のスペイン国境からほど遠からぬ港町 Port-Vendres <Portus Veneris <Aphrodisiás である。

以上の地名は、いわば公的な共通語の構成員であるが、その他にプロヴァンスの言語に組み入れられたためにそういう形ではあまり知られないギリシア語源の語もある。gr. kálōs (綱) > prov. caliourno (舫索), ankōn (入江, 湾) > ancouno (角, 片隅), tarsós (櫂) > tarroun (棒), stélē (柱, 柱石) > estèu (暗礁)。プロヴァンサルで停止せず一般の仏語にまで入った例に gampsós (曲がった) > ganso (紐の輪) > ganse, dóma (家) > doma (平屋根) > dôme など。dôme と同じ部類の語に andrón (廊下)¹⁹⁾ > androna (小さい通り) がある。気象に関する語もプロヴァンサルに残った。néphos (雷) > néfo, bronté (雷) > brountar (雷が鳴る), kirkios (= thraskias, 北々西の風) > cers (北西の風) など。また, pýr (火) < empurá (火を焚く), týphos (煙) > tubo のような語がプロヴァンサルで今日にいたっているのも火や煙が海上での目標になったからであろうと Wartburg は語っている²⁰⁾。

若干の植物名にギリシア語が残っている。tríphyllon > trèfle (つめくさ), この trèfle はもちろんマルセーユにとどまらず一般の仏語に入った。ákastos (= sphéndamnos) > agas (かえで)。parthénis (にがよもぎ) は arsemiza (古プロヴァンサル) と arsenizo の二形を残したが、いずれにもギリシア語のラテン訳語 artemisia が介入している。ギリシア語の *lh* がどちらも *s* になり、後者では *n* が保たれている。この語の現代の標準語形 armoise は南仏とかかわり

19) *ἀνδρῶν* は本来「男性用の部屋」であるが、「廊下」の語義はローマ人のものであるから、この地方のギリシア人のローマ文化摂取の一端がうかがえる。もちろんラテン語そのもの (*andron*) はギリシア語形の借用にすぎない (Plinius, Ep. II 17, 22).

20) *Op. cit.*, p. 19

なく gr.>lat.>fr. の系譜である。

その他に catharós (きれいな, 澄んだ) > charà (洗う), epikársios < biais (斜めの), phántasma > fantôme など。後二者は南仏を経て一般に使用されるようになった例に入る。

フランス語全体から見ればかつてのギリシア語のあとはこのように数えるほどでしかない。7～8世紀もの長い期間にわたって南仏地方の沿岸を占め文化的にも高度なものをもっていたはずのギリシア人たちが、その文化をガリア一帯にまで広めることもなく、したがってギリシヤ語そのものも狭い範囲に限られていたのは、かれらが商人であり、マッサリアとかニカイアその他の都市も商都としての役割以上のものは果たさなかったからであるといえよう。しかしこの点では、ローマに先がけて地中海でカルタゴと競ったのであるから、かれらは偉大であった。すでに述べたように、前125年ごろケルトの攻撃に脅えたこの地のギリシア人たちは同盟者たるローマに援助を求め、かれらに併合の機会を与え、結局ガリアにおける最初の属州を作らしめた。前49年ローマの政権争いに捲き込まれたマッサリアはポンペイウスに左袒したが、カエサルの勝利によって首都の地位からすべりおち Narbo にその座を明け渡した。かくして南ガリアでのギリシアの影響は衰えた。

VI

紀元前1世紀の半ばにローマのガリア征服がなされたが、当時ガリアにあった先住民ケルト人は前5世紀ごろには定着していた。したがってかれらの文化は当時としては土地特有の一定した風貌をそなえていたであろう。ひとくちにケルト人といっても内部では数多くの部族に分かれていた。ガリアのケルト人の他にポー流域、ダニューブ流域、黒海北岸、小アジアの一部、イベリア半島の一部、ブリテン諸島などにもケルト人は広がっていた。方言のような形で分かれ、細部では異なった展開があったかもしれないが、かれらの言語は共通のものだったと思われる。言語に限らず文化の諸相においても共通

したものが多く、その典型としてドルイド教の伝統があげられる。かれらはしたがって地域的に、分散し各地方でそれぞれ異なった条件の下で諸々の影響をこうむったにしてもやはりケルト人としての統一性をもっていたと考えられる。本章では、かれらのケルト語が伝語にどのような足跡を残したかを検討したい。

ギリシア人と同様にケルト人も多くの地名を残している。フランスの首都 Paris をはじめ Angers, Tours, Senlis, Le Mans, Bourges, Nantes, Poitiers などすべてケルト語である。以上の都市名がすべて *s* で終わっていることに注目する必要がある。Paris の古名は Lutetia で、この Lutetia という地域（シテ島）に住んでいたケルト人が Parisii だった。ガリアが完全にローマ化されるまではケルト人は各部族ごとにその集団を表わす名称と地域（都市）名をもっていたことになる。ところがローマの支配が続くあいだにかれらはその都市名を必要としなくなった。その理由を Wartburg は、カラカラ帝の勅令²¹⁾によってガリア人が「ローマ市 (civitas Romana) 民」となったときから部族名と都市名との併存の意味がなくなり、より一般的であった部族名の方がもっぱら利用されこれが都市名を兼ね、ついには都市名そのものになったと説明している²²⁾。いったん都市名になるとラテン語の格変化に合わせて奪格の用法が頻繁になり、たとえば Parisii は主格であるが、これが civitas de Parisiis という形で使われ今日の Paris にいたった。Parisii は第二変化の名詞であるが、奪格が *-ibus* という語尾をとる第三変化名詞も同様に考えることができる。これは俗ラテン語で *-is* という語尾をとったからである²³⁾。たとえば Bourges はカエサルがガリアにきたころ Avaricum と呼ばれていた²⁴⁾。この Avaricum を主府としてい

た住民が Bituriges²⁵⁾人で、この部族名が奪格 Biturigibus>Biturigis (俗ラ) となり Bourges になった。問題の *s* はすべてこの奪格の名残りである。上記の他の都市名も同様な来歴である。右欄に示したケルト人の部族名は便宜的に主格にしておく。() はケルト時代の都市名である²⁶⁾。

Senlis<Silvanectes (Ratomagos)

Amiens<Ambiani (Samarobriva)

Rennes<Redones (Condate)

Soissons<Suessiones ([Augusta] Ouessonnon)

Angers<Andecavi (ケルト名不明, Juliomagus は Julius (ローマ人名), magos (ケルト語) によるローマ人の造語)

Tours<Turones (Caesarodunum, これもガロ=ロマン期の造語であろう)

Le Mans<Cenomanni²⁷⁾ (Vindinon)

Arras<Atrebates (Nemetocenna)

つぎに二要素の合成によってできた地名で今日に残っている例をあげる。

-dunum (丘, 砦) : Virodunum>Verdun

Lugdunum>Lyon, Laon

これらはかつて砦であったことが推測される。Châteaudun も同様であろう (castellum, dunum で同じ意味を表わすラテン語とケルト語の合成)。

-durum (砦) : Altessiodurum>Auxerre

-briga (砦) : Donobriga>Deneuvre,

Denèvre ; Scaldobriga>

Escaudoevres

-magos (野原, 市場) : Catomagos>Caen

Rotomagos>Rouen.

ケルト語の接尾辞によって合成されたのもあ

21) Constitutio Antoniniana (212年), ローマ帝国下のあらゆる自由身分者にローマ市民権を付与した法令。

22) *Op. cit.*, p. 23.

23) A. Dauzat, *Les noms de lieux, origine et évolution*, pp. 131-32.

24) Caesar, B. G. 7, 13 ; 7. 31 ; 7. 47.

25) Bituriges Cubi のこと。Bituriges Vivisci 人の都市は Burdigala であるが、この場合はこの古い都市名から直接現在の Bordeaux が出ている (Dauzat-Rostaing)。

26) 詳しくは Dauzat-Rostaing 参照のこと。

27) *Le Mans* はかつて *Celmans* と呼ばれていた。これは *Vindinon* に住む人々を表わす名詞の奪格 *Cenomannis* から出ている。*Celmans* の第一シラブルが指示形容詞と誤解され、“*ce Mans*” と呼ぶ理由がなかったので “*le Mans*” に変わった。*Le Clays* など同様な例である (Dauzat, *op. cit.*, p. 61)。

る。中でも“-acum”は特徴的で、南仏では“-ac”，北仏では“-y(i); ai”と今日では別の形になって残っている。Cameracum>Cambrai, Albinicum>Aubigny, Juliacum>Juilac (南); Juilly (北), Saviniacum>Savignac (南); Savigny (北) など。Wartburg によれば²⁸⁾接尾辞 -acus (>acum) は本来一般的に付属を示した。たとえばある種類の木からなる森林を表わすためにこれをその木の名のあとにつけ、betula (樺)>Betulacum などとした。さらにこれが人名に付され、その人物の所有地、田畑を表示するようになった。Brennos (ケルト人名)>Brennacus。この造語法はローマ占領が確立してから盛んに行なわれたため、現在 -ai, -y, -ac で終わっている地名の多くはその語幹にローマ人名が含まれている。上記 Aubigny も Albinus というローマ人名が含まれ、本来は「アルビニウスの土地」という意味であった。同様に南仏の Aurillac (Cantal 県)、北仏の Orly (Seine 県) はともに「アウレリウスの土地」という意の Aureliacum からきている。

地名以外に仏語に残されたケルト語も少なくない。ローマからガリアへやってきた征服者たちは新しい土地で初めて見たもの、ローマになかったものなどの名称は、その土地での名称をそのまま使用せざるをえなかった。仏語の char はラテン語で carrus であるが、これはケルト語で四輪の馬車を意味する語をそのまま取り入れた例である。Braie<braca はこのような推移をよく示す語である。ガリアのケルト人はゆったりした長ズボンを着ていたが、ズボンを着用する習慣のなかったローマ人は最初とまどいながらもやがてはこのガリアの衣服を名称ともども自らのものにしたのである²⁹⁾。標準的な仏

語としてよく使用されている例を若干あげよう。農作業に関連して raie<rica (畦筋), javelle<gabella (表などの束), soc<soccus (犁べら), glaner < glenare (落ち穂をひろう) など。植物名に bouleau<betua (樺), bruyère<brucus (ヒース), if<ivos (いちい), chêne<cassanus (かしわ) など。Sapin はケルト語とラテン語の合成らしい (sappus, pinus)。動物名にもケルト語系は多い。mouton<multo (羊), bouc<bucco (山羊), alouette<alauda (ひばり), lotte < lotta (かわめんたい) など。

地表相を表現する語は多いが、ケルト語から出たものに、つぎのような例がある。breuil < brogilum (垣で囲まれた雑木林), grève<grava (砂浜), boue<bowa (泥土), boubier<borva (泥沼), lande<landa (荒野), combe<cumba (小谷) など。

尺度を示す arpent は arpennis, lieue は leuca が残ったものである。また、ローマ人は酒容器として陶土器しか用いなかったが、ガリア人は木製の容器を利用していた。Tonne (樽) bonde (樽の栓) とともにその名残りである。

このように数えあげていくと、ガロ=ロマン語に吸収されて今日にいたったケルト語はかなりなもので、決して無視できないことがわかる。ケルト語はもちろん印欧語の一派でラテン語との類似性は否定できず、互いに吸収しやすかったといえる。結局ラテン語が主流となってケルト語はすたれたのであるが、ここで政治・経済などの社会的な要因が大きく働いていることはいうまでもない。言語それ自体に優劣などという相対性はありえないのだから、言語使用者の置かれている社会環境が言語推移の少なくとも一つの原因となるのである。この意味合いにおいてガリア上層階級が子弟に施した学校教育は一般的なローマ化、言語のラテン化の母体であったといえる。かれらは都市に住み、直接ローマによって支配され、かれらはまたその権威によって同胞を支配したのである。ローマ権力の代行者としての地位をまっとうするには自己のローマ化こそ最良の手段であったはずだ。

28) *Op. cit.*, p. 24.

29) Bourciez (E., *Éléments de linguistique romane*, p. 58) は衣服に関する語で、ケルト語からラテン語になったものとして他に sagum, cucullus, bulga, camisa などあげている。Camisia は chemise という語形を残したが、これが Bourciez のいうごとく、ケルト語源かどうか明確でない (Ernout-Meillet, *Dictionnaire étymologique de la langue latine* (4^e) 参照)。

VII

ゲルマン民族が大移動を起こしたのは5世紀であるが、辺境地帯においてはガロ=ロマン人とゲルマン人との接触はそれ以前からなされていた。ローマが政策的に国境近辺のゲルマン人がガリアに入るのを認め、かれらに植民地を作らせたりあるいは金で雇って兵士にして敵意をもって侵入しようとするゲルマン人に対する防壁にしたりした。このような形で初期にローマ化されていたゲルマン人たちがのちに侵入するゲルマン人たちの言語のラテン化に大きく貢献した³⁰⁾。しかしこの時代の比較的平和な両者の交渉はローマ帝国の終幕であると同時にフランス国家成立の序曲でもあった。5世紀になるとそれいまでかろうじてもちこたえていたローマはついに力を失って滅亡し、ゲルマン諸族が相争って新天地を求めてやってきた。そして最後にクロヴィスがガリアを統合した。

言語の面でラテン語の地位は動かしようもなかったが、かといってフランク人がかれらの使っていたゲルマン語をすぐに忘れたのではないということはよく指摘されている。王族や貴族階級は長いあいだゲルマン語を保持し、シャルルマーニュはフランク語の文法を手がけたとさえいわれる。ゲルマン語を忘れた最初の王は987年カペ朝の王となったユグ=カペであった。それまでに約5世紀が経過したわけで、したがったこの間かれらはラテン語とゲルマン語を併用していたことになる。

ゲルマン語が当時のラテン語に発音上の影響を与えた要素が二つある。一つは後期ラテン語の音韻体系からとくに消えていた喉頭音 *h* が、この音で始まるゲルマン語の借用に際して語頭において再導入されたことである³¹⁾。hapju > hache (斧), haifst > hâte (急ぐこと), helm > heaume (兜, 独 Helm) などである。もう一つは、*w* が語頭に立つゲルマン語の借用語で、語

頭子音を強めて発音する後期ラテン語の傾向によって *w* が *gw* として表わされたことである。この *gw* は12世紀の後半にいたるまでには *g* に単純化されたらしい³²⁾。ゲルマン語 wardon は古仏 guarder を経て garder となっている。同様な例に waidanjan > guaaignier > gagner, wärento (wëren の現在分詞) > garant > garant など。その他語頭に *g* の立つ仏語となったゲルマン語に, wantu > gant, werra > guerre, wahton > guetter, walahlaupan > galoper など数多い。

宮廷に関する語で roi < rex, duc < dux, comte < comes などはラテン語が残っているが、ゲルマン語の遺産もあることはすでに述べた事情によってうなずけよう。baron < baro, maréchal < marhskalk, sénéchal < siniskalk, échançon < skankjo など。また marche (辺境) の語源は marka で、ここから「辺境警備長官」の意で marquis が生じた。

ケルト語と同様に植物名にもゲルマン語の痕は少なくない。hulis > houx (柘もどき) kresso > cresson (オランダがらし), trugil > troène (いぼたの木), sahla > saule (柳) など。食生活の柱である blé もゲルマン語源の可能性もある³³⁾。独語 Garten にあたる仏語は jardin で、これは独語に見られるようにゲルマン語源 (gard) である。庭の周囲にめぐらす haie は hagja (独 Hag) にほかならない。

感情とか性格を表現する際に異なる言語間で微妙な点まで一致させることはきわめて困難である。ゲルマン人がガロ=ロマン語に移行しながらもこの種の語彙を若干仏語に残しているのはここに理由があるのかもしれない。urgôli > orgueil (高慢), haunjan > honnir (辱める), hardjan (堅くする) > hardi (大胆な), laid > laid (不快な) などである。

最後にゲルマン語がロマン語にゲルマン語の

30) M. Cohen, *Histoire d'une langue, le français*, p. 66.

31) M. K. Pope, *From Latin to Modern French*, p.15.

32) Ib. § 636, 192, 202, 203参照.

33) ゲルマン語 blad, ケルト語 blato のいずれであるか一定でない (Wartburg はゲルマン語源としている。op. cit., p. 58).

接尾辞を付してできた例をあげよう。

-ard : vieillard, richard, couard

-ald (aud) : badaud, ribaud

-ing > enc : paysan, cormoran.

VIII

ガリアにおけるゲルマン語はわずかな痕跡をとどめて消え去った。その使用者たるフランク族はフランスという国家の成立の礎を築いたにもかかわらず、言語に関しては建設するより以上に破壊したのである³⁴⁾。かれらは二言語併用をしばらく続けるうちに被征服民の言語に同化されていった。もう一つの言語であるラテン語はすでにゲルマン民族の大移動以前にいわゆる俗ラテンの時代に入っていて時とともに徐々に古い衣を捨てつつあった。どうしてこの言語が残り、征服者のそれは消えたのであろうか。簡単に解答の出ない問題であるが、ここでもやはり文明・文化の力を繰り返し強調してよいだろう。かつてカエサルが軍隊を率いてガリアを占領したときから、ラテン語はケルト語を駆逐した。言語推移の契機はゲルマン人の場合もローマと同様であり、かれらはギリシア人のようにシャボンを売りにきた商人では決してなかった。しかしラテン語とゲルマン語とがそれぞれ背後にもっていた文化はきわめて異質であり、かれらはこの差異をラテン語を犠牲にするまでには克服できなかったのである。言語は決してそれ自体として存在しうるものではない。ラテン語についていえば、つねにその最初の使用者の現出せしめた文化と互いに支え合っていた。ガリアの軍事支配は歴史上きわめて衝撃的な事件であった。同時に言語および文化の吸収、普及もまさにラテン的エネルギーをもってなされたといえよう。無数の試練を経て高度に洗練された組織力と支配思想がそれを可能にしたのである。深く広く浸透した言語と文化の主体はガロ＝ロマン人であったが、ゲルマン人がローマ権力を追い払ってガリアへ入った時点においてかれらはすでにローマから独立してそのガロ＝ロマン

文化を維持していたのである。したがってローマ人がいなくなってもラテン語はガロ＝ロマン語、俗ラテン語としてその文化の前面に立っていた。ゲルマン人はあまりにも大きいこのローマの遺産を棄てる代わりに継承せざるをえなかった。かれらにはローマ文化、ガロ＝ロマン文化に太刀打ちできるようなものがなかったというべきであろう。フランクの王朝に始まって今日にいたったフランスもこの線上でやはりガロ＝ロマン、そしてローマ文化の継承者であるといえる。それでは仏語はいつ誕生したというべきだろうか。ラテン語のロマンス諸語への分裂の時点としたり、あるいは国家成立と同時であるとする人³⁵⁾もいる。後者の場合、国家と言語という両概念を結びつけてきわめて簡潔であるけれども、事実はこのように簡単な説明を許すものではない。要するにこの問いに無理に答えを与える必要はない。ゲルマン民族の侵入以前に崩れ始めていたラテン語、すなわちガロ＝ロマン語にその出発点を置き、したがってラテン語と同時に誕生したと敢えていうこともできるのである。文学などの形でなにひとつ残すことのない当時の言語使用者の心理はわれわれが推測するにはあまりにも遠い。

34) Bruneau, *op. cit.*, p. 28.

35) Cohen, *op. cit.*, pp. 69-70.